12 日本のミュージカル（前回資料と同じ）

＊戦前は宝塚と浅草でそれぞれ独自の発展
＊戦前の浅草と戦後の東宝系ミュージカルをつなぐ存在が榎本健一（エノケン）
＊戦後は宝塚／東宝（帝劇）が中心、のちに劇団四季が参画
＊戦後 1960 年代初頭まではオリジナル・ミュージカルの創作が盛んだったが、1963 年帝劇の『マイ・フェア・レディ』以降、海外のヒット作を移入して上演することが主流になる
＊創作ミュージカル集団もいくつも現れるが、成功は難しい
＊「2.5 次元ミュージカル」は未来を開くのか？

●日本のミュージカル史年表

宝塚/東宝	浅草/四季	その他
黎明期(初期黄金期？)		
1914 宝塚少女歌劇第一回公演 （『ドンブラコ』『浮れ達磨』『胡蝶』）		
	1916 浅草オペラはじまる （帝劇洋楽部が解散、団員が浅草で公演）	
1919 宝塚音楽歌劇学校と宝塚少女歌劇団設立		
	1920頃 浅草オペラの全盛期 1923 関東大震災。浅草オペラの終焉	
1924 宝塚大劇場完成 1927 宝塚フランス風レヴュー『モン・パリ』		
	1928 1928東京松竹楽劇部(松竹歌劇団)創設 1928 浅草でカジノ・フォーリー（エノケン）	
1934 東京宝塚劇場		
	1935～ エノケンがミュージカル的映画量産	
1938 宝塚海外公演		
		1939 映画『鴛鴦歌合戦』 1939 映画『狸御殿』その後シリーズ化
戦争		
	松竹歌劇団	
1946 宝塚活動再開 日劇でダンスショー		1948 わらび座の前身誕生
1950年代～60年代初頭：オリジナル・ミュージカルの時代		
1951 帝劇ミュージカル第1回公演 （『モルガンお雪』菊田一夫、越路吹雪） 以後1年に5作ほど		
	1953 劇団四季設立(当初は演劇のみ)	
1956 東宝ミュージカルス第1回公演 （『泣きべそ天女』雪村いずみ、 『恋すれど恋すれど物語』エノケン、越路ほか）		
		1959 東京労音ミュージカル『可愛い女』（黛敏郎、安部公房）
1960 東宝ミュージカル爆笑公演 『雲の上団五郎一座』（エノケンほか）		1960 大阪労音ミュージカル『見上げてごらん夜の星を』（いずみたく、永六輔）
1960年代半ば～：輸入ミュージカル隆盛/オリジナル・ミュージカル低迷		
1963 帝劇がブロードウェイ・ミュージカル上演 （『マイフェアレディ』、江利チエミ、高島忠夫）		
	1964 四季がミュージカル開始。 オリジナルミュージカル『はだかの王様』	
1967 宝塚がブロードウエイ・ミュージカルを上演 （『オクラホマ！』）		
1967 帝劇『屋根の上のバイオリン弾き』（森繁久彌）		
		1968 東京キッドブラザース結成
1969 帝劇『ラ・マンチャの男』（松本幸四郎）		
1970 帝劇『スカーレット』（風と共に去りぬ）		1970 東京キッドブラザース オフ・ブロードウェイ進出（『黄金バット』）
	1971 四季ブロードウェイミュージカル上演 （『アプローズ』、越路吹雪）	
	1970s 四季『ジーザス・クライスト＝スーパースター』 『ウェストサイド物語』『ユタと不思議な仲間たち』	
1974 宝塚 『ベルサイユのばら』		
		1977 音楽座 活動開始
	1979 四季『コーラスライン』でロングラン公演開始 1980s 四季 『エビータ』『キャッツ』『オペラ座の怪人』『夢から醒めた夢』	
1987 帝劇『レ・ミゼラブル』		
		1983 ふるさときゃらばん 活動開始
	1990s 四季 『李香蘭』『ライオンキング』『美女と野獣』	
		1995 スイセイミュージカル 活動開始 1995 ミュージカル座 活動開始
1996 宝塚『エリザベート』 2000 帝劇『エリザベート』 2006 帝劇『マリー・アントワネット』（海外に委嘱）	2000s 四季『異国の丘』『南十字星』『ウィキッド』	2000 東京キッドブラザース解散 2003『テニスの王子様』（2.5次元ミュージカル開始）

13 ミュージカルの今後?

●ジュークボックス・ミュージカル

ジュークボックス・ミュージカル（英: jukebox musical）は、ミュージカル用に書き下ろされた新曲ではなく、既存の楽曲を使ったミュージカル、またはミュージカル映画のことをいう。一般に、楽曲は、特定のミュージシャンかグループに関連したものが使われる。楽曲は劇的な筋にはめこまれ、その筋は多くはフィーチャーされるアーティストの伝記であることが多い。 (Wikipedia による)

ちなみに Wikipedia（英語・日本語とも）のように、17 世紀のバラッド・オペラや 20 世紀ビートルズの音楽映画などにまで概念を拡げるのは不適当である。前者は原曲となるバラッドが匿名(無名)だからであり、後者はビートルズ自身が関与しているからである。この授業では、楽曲を用いられているミュージシャンも楽曲自体も人気が高く、かつ本人が直接関与しないで作られるもの、端的に言えば、既存のヒット曲の人気にあやかり、音楽的には創造性の見られないものを「ジュークボックス・ミュージカル」と呼ぶ。

1980 年代から著しく増える（Wikipedia 英語版の一覧参照）。
代表は ABBA による「マンマ・ミーア！」、クイーンによる「ウィ・ウィル・ロック・ユー」など

→ 「ジュークボックス・ミュージカル」の濫造は創造力の枯渇であり、ミュージカルの健全な発展を妨げる。

●ポピュラー音楽の新しいスタイルとミュージカル

一般のポピュラー音楽界では 1980 年代からヒップホップが台頭し、2000 代にはヨーロッパ系のダンスミュージック（エレクトロニカ）と合体した EDM（Electoronical Dance Music）となって、あらゆるポピュラー音楽に浸透している。一方、ミュージカルの音楽スタイルは、1970 年ごろにロック・ミュージカルが登場して以降、ポピュラー音楽全体の変化に後れを取ったままである。ヒップホップを取り入れたミュージカルの試みはあったが、成功した作品は長い間なかった。そこに突如現れ、ヒップホップ・ミュージカルの初の成功例となったのが 2015 年の《ハミルトン》であった（第 1 回の授業資料参照）。だがその後、それを追いかける成功作はない。R&B 的な発声や歌い方が多くなっているという傾向はあるものの、ミュージカル全般の音楽スタイルは既存のものの寄せ集めというところに落ち着こうとしている。

→ スタイル上の安定志向もまた、健全な発展の妨げではないか。今のミュージカルは、果たして次の時代をも生き抜いていけるのか。

●2.5 次元ミュージカル

日本では、2000 年代に入って「2.5 次元ミュージカル」が流行し、そこに新しい可能性を見る人もいる。
2.5 次元ミュージカルとは、「漫画やアニメ、ゲームなどを原作・原案とした舞台芸術（主にミュージカル形式）の一つ」(Wikipedia)であり、基本的に原作の漫画やアニメ、ゲームがヒットしていることが前提となっている。つまり原作のファン層を舞台に取り込もうとする企画であり、原作の人気にあやかろうとする点ではジュークボックス・ミュージカルと同じで、表層的な目新しさはあっても、本当の意味での創造性やオリジナリティはない。
もちろん《ショー・ボート》以来のミュージカルの歴史の中でたいていの作品には小説などの原作があるが、多くの成功例ではミュージカル化によって魅力が高まり、知られていなかった原作の価値があらためて認識されたりしている。しかし 2.5 次元ミュージカルの場合は、原作の評価がもともと高く、ミュージカル化によって原作が再評価されることは、まずない。むしろ出演者たちの歌の貧弱さが目立ち、ミュージカルとしての価値を出演者が貶めるという事態も生まれている。

→ 「新しい可能性」はあくまで表層的なものにすぎず、ミュージカル文化にとっては、これも健全な発展を妨げるものになっているのではないか。

●日本からの発信は可能か?

1950 年代 60 年代に盛んだった日本のオリジナル・ミュージカルは、その後低調であると言わざるを得ない。ブロードウェイでは、作品数が多く、演者たちの基礎能力も高いことによって、一定の質は保たれている。日本でも、目新しさだけでなく、原作の人気に依存することもなく、多くの人々に訴えかけられる普遍的な価値をもったミュージカルは生まれるだろうか。